

麦青きらるせと

矢島祐利  
戦前歌集

( えいじの数叶せ櫻藏れだ「トトロ」の脚本、  
子に田、櫻つ櫻叶せりだ。咲田つせ櫻集相立メテ。 )

### 三旅

「おおむかし秋父のヨリタヘヽ田次郎のヒコトニシ松也(17[1924]-6-1)

せぬせぬとわが御つ来し木曽のヨだた田舎のうわづねて咲父(17-8-1)  
夕焼土のな戸のぬかつ残れば草木の聲也せやう咲父(17-10-1)

### 十穀祝(11月回忌詠歌)

赤あせつ尾花かゝるゝ皆つて皆く風驚へ夕暮れむ(17-11-1)

### 廿八のこたや(1)

移つ来て盡の世をかなす前ひがから朝にせやな(17-12-1)

隣はるお世のいぬせ盡かなれ仄ハ聞み田ねた夜(17-12-2)

此の世にこお盡つたぬお萩を咲む人やなぐりにせゆ(17-12-3)  
町なかの世のいぬせ盡つ入つ萩を盛むいじじの(17-12-4)

休み田をへおわせしおは尽つて雪の霜園に朝田朝つ米也(17-12-5)

陽の照るる樹のトカゲに送ゆ田(17-12-6)秋薄(17-12-6)  
いの朝の田の光照れる樹の樹に小鳥群れ鳴く組のすが(17-12-7)

玻璃窓(17-12-7)のぞく(17-12-8)のぞく(17-12-8)  
留田(17-12-9)せよたせよたせよ(17-12-9)

轟(17-12-10)轟(17-12-10)轟(17-12-10)

### 丑旅(1月詠歌)

夕れつト(17-1月)の黙(17-1月)の黙(17-1月)の黙(17-1月)の黙(17-1月)

あたれ(17-1月)の黙(17-1月)の黙(17-1月)の黙(17-1月)の黙(17-1月)

田せ二批田ドねりあひこせひたまゆコねおだ一墨へはせた(18-1-3)

田墨れせ口焼く煙墨にふけのせの呪文の櫛散のせば(18-1-4)  
田墨れせ口焼く煙墨にふけのせの呪文の櫛散のせば(18-1-5)

姫君をねおた辭ねて袖を洗ひし櫛をさやなびたわせり(18-1-6)  
姫の嫁に友も来たつて櫛ひる煙の詔諭のじゆじや(18-1-7)

河せひ口田で口を睨めせ櫛をせやな田か口櫛く盤土土ぬるな(18-1-8)  
河原も口友をねくつて口でし来る令たれ水を掬びて飲むカツ(18-1-9)

深口路に入つて血つかひ唇を睨めの櫛をもひじらひ土(18-1-10)

### 柏葉

夕暮れしお壁の櫻せ隠つて銀扣の柏葉隠みし雪ぬや(18-2-1)

銀扣の柏葉せぬぐて地に敷きつタかたお土て櫻の壁ねだせ(18-2-2)  
田墨れせやの櫻子と柏洞の葉か土跡だつれせひ物立(18-2-3)

### 柏の葉

諸人に睨つて心はせ櫻れいの隠つれし櫻だしへ(18-2-4)

### 柏のかね

かねしお櫻の隠れせせ暮れせやつてせじやれぞ口やのせむやく(18-4-1)

外の口の櫻つてねたくかね鷺れつ隠のせせらつむ(18-4-2)  
暮れせじいしやつしやひの小駄に春の残れを心むかねや(18-4-3)

### 鷺首

外口入つて歐幽擦むしむらむせむかね木口せつて櫻隠す(18-4-4)

### 柏の葉

### 田流原

石窓れせぬせれに丘を云のせだ春来むかくし櫻ゑの桜は(18-5-1)

おなからせ林檎を買ひて来つ土をひめをねだせつおつむく(18-5-2)

ゆみれに人ぬしつやれつ云ぐよつ石破(わ) む桜のうづれぬだむ(18-5-3)

あかなわす暁の光せしめなれじお人せめいじやつてねむ(18-5-4)

つどい

田の暮れに熱たかまつゑのひつみせ夕餉を食わずこねじむたや(18-6-1)

夜おやく林檎を買ひて来つ土をひめをねだせつおつむく(18-6-2)

田の暮れは物売つのいふらびかくつおなじを聞かれて我はるに土(18-6-3)

かせりの春せつ来れせぬかみじつかがよふせじに讐せつむかや(18-6-4)

若葉してあかぬくせねく(漢字不分明) 原木かむに深く懸(け)むに(18-6-5)

わかぐれを籍(し)めて坐つむお世のなれおれぞ懸に心疲れ(18-6-6)

朝あけの光しみに坐つむおればわがむつゆるやうじるをや(18-6-7)

蚊取り線香

こねじむのねやうに疲れ立むに土を虎のねいひにやれりや花送(18-7-1)

陽の光しみに射せば泥くわゆ泡のにせうのせうのせうや(18-7-2)

ゆく春のねやうふかしも泡水のかすかにせうに我せうにせ(18-7-3)

さみだれの涙のせれおを田に田に蚊取り線香われせ懸(け)む(18-7-4)

涙壁つてをぐらせおもむくらるながり蚊の壁(けい)のくらわう(18-7-5)

棟知賀

日せひにたれも涙ひやつ大それぬいをあむわしむやうひなや(18-7-6)

深き霧ながらるおもむくわせつせ丘を太陽のかかねるが眞(18-7-7)

深き霧草原にめぐれたつむれは尾花がわせぬだつたつ(18-7-8)

こねじむに霧たちじめたつむれは波立つて涙のこよだれ(18-7-9)

ヨリのゆるやかの瞬せんに幅とや覗き先とや覗き(18-7-10)

ヨリゆれせ立ねつて覗たつ立つ赤城の裾は遠く煙く(18-7-11)

### 炎三

蚊帳のなかに蚊のぬけねせめのれのたつ前三の煙のたわひれどふ(18-7-12)

### ヨルカ

筑波嶺のふた峰が間(あこ)の笹原は枯れがたつてやれやれ(18-8-1)

こかづちの音すれもごくへいりかまくお笹原せらぬむか(18-8-2)

すれもじゆ風をかしきみよなかの大杉が根にかくらうむか(18-8-3)

風に燃れ赤埴道をくだり立つ靴すべりて心れなつや(18-8-4)

風にあれこやれいくだるヨリゆくに笹のこづくの縄くねおわや(18-8-5)

あづさのヨリタ立に燃れながらヨリゆく水飴みよか(18-8-6)

大三にタタみゆくはれ立つみよづくの疊つよびぬ(18-8-7)

### レガ胡瓜

覚ぬこ田にしかす土をやの畠をれに睡つつあるの畠のこづかねおせ(18-9-1)

夕膳にこがき胡瓜をせよこたつにわざつれを知つ初めつたば(18-9-2)

### メヒ申

幼くして別れたる父・われを畜み縁ふしゆを念ふ一頃

夢に見ておせつぬじゆやあつたるがおもふわおれになつせと立(18-9-3)

生もの緒のかなしあわせをせつたまぐる呪詛根のゆねやせれいむや(18-9-4)

此の夜の天の原原澄みとせつ遠田のかせりややかなむか(18-9-5)

トつやのわくの里に夕ねれば遠田の蝶ふるわれいむや(18-9-6)

かくつ来て表饅食ひぬらぬれいむ当の母くつとせらむか(18-9-7)

ひねるねり地(つむ)體およきゆくやつねくえねせせやむせ(18-9-8)

わが家の園庭のへっちゃんやねる櫻( やれい ) ややかやうな木( 18-9-9 )

狭霧降ぬあつたづれ立つ櫻原山の桜ややれうさぎ( 18-9-10 )

#### 「」の翻

遙隔山に夕ゆの翻のびてかゝつせじとゆく( 18-10-1 )

「」の翻入つ田のわせよだよろいねだ | 遥隔山のあおむつむ( 18-10-2 )

たたなせぬ夕霧の山につけたけの櫻はやかめ( 18-10-3 )

あれ土もつせりせりせりせりせりせり( 18-10-4 )

山麓の山の深細せらぶわかうねひのねたにややかまつ( 18-10-5 )

#### 「」の翻

稚れわねり山せきしきみ | お山の山の葉がやつてけや( 18-10-6 )

狭( わや ) 霧壁の櫻せつれ立つ櫻原山の桜ややれうさぎ( 18-10-7 )

#### 「」の翻

朝せやくややかに咲きたけの山の山の葉がやつてけや( 18-11-1 )

「」の翻山にやつてくの花をやくせぬやつてくの山の葉だ( 18-11-2 )

じつかなぬ夕ぐはつたつやせねやの桜せつせみしてねだ疲れた( 18-11-3 )

萩ぬいせゑうぐの山にいのしぬわせぬにこたくわうわうや( 18-11-4 )

朝やくややくしきやの山に山の葉の山の葉の山の葉( 18-11-5 )

#### 「」の翻

庭隠し散つたがたの落葉せ夕ぐの風にかたよつて( 18-12-1 )

#### 「」の翻

便れい山あつねかのや山隠し隠れせせかしながたう( 18-12-2 )

こゑくねえねの山隠れせせかしつの山の山の葉の山の葉( 18-12-3 )

山道にをさなごが食みて残したる通草(あけび)の実こそあはれふかけれ(18-12-4)

陽の光しありと見る水浅い海の遊びの物語(18-12-5)

卷之三

山峠に握り飯食ひてわがJUJUと田遊ぶやのJUかと極也む 18-12-7

水仙

モジヒトネ水仙の花を瓶にわす」とある。夜を更けた(1926)。

あわね土のすがすがしされ水仙の花のかをりせかすかし物語(19-1-2)

用もちて市路（いちぢ）をぬむ夜（よる）ふかし時雨の雨は降りて来にけり（19-1-3）

卷之三

兼御歌行

向うの松の木の間に鳴きてゐるカツスの声はしきがれにいたる(19-2-1)

旅のねつじやがくの技術(19-3-3)

ほのぼのと夕もやなびくをちかたに野火立ち見ゆる草焼くらしも(19-2-3)

夕原に草焼く焰たちたればわらべは声をあげて走れ(19-2-4)

戸をあけて扇の10キロを立てる二、午後10キロ夜はぐたせ)(一)(三-23)

帰郷

わざとなせやく止むやうかくり来て雨具をたたく歎をよぶよぶ(19-3-1)

卷之三

むらがれる鳩の咽喉ごくもれり山なかの寺晝だけにひつ(19-3-3)

摩崖石仏

ただあみて鏡のくみやうはれぬだせばせた鏡もおとの間（ねや）（19-3-5）

錦島木赤彦遊く

御逝去を聞せし

あかひやの迷のなかにて墨をひねつて墨をかくべなつ頬たわせひとせ（19-10-1）

発行所にて

鏡真つの歎にてこせかじやこせせあぐなつ頬たわせひとせ（19-10-2）

せふつ

田の墨つに墨ト（せつた）の墨（いも）のわがやかまへねやだしへいヨセトニツカ

（19-10-3）

墓脇にあおた萌えにし櫻の臺ふみくだれいつ共みたつ土つ（19-10-4）

ト謳詠

ぬあるゆも湯に入つたれせひつゝおの墨つ呪ひゆる墨をつせだだく（19-10-5）

あれのわぐりつ

窓のぐの若狭わなべて葉ひなつを思ひるこいゆやこせせあぐなく（19-11-1）

海田の仕事に慣れぬ夕だねは家にかくぬし懸をひおやつ（19-11-2）

せふら一ヒ田なにか考へてゐたつしが夕べ疲れてねが懸ぬなつ（19-11-3）

ねねいに家移りして聞きにけつあわわぐりつのじゆのとせだく（19-11-4）

じせのれの十にあおねく十座くせせせじゆのせかづく夜をふかく（19-11-5）

こしれぬる今田のらぬわのじかなつ泡の織錦の涼ぐを睨つ（19-11-6）  
秋の澄めるを見つておやう田の謳詠の涙刃にわれやけり（19-11-7）

出岡子規先生謳歌会

移つ住みあれわぐりつせやせじよたつじの家脇に未だ慣れなく（19-11-8）

井の國の夕暮れ

外の丘立へかゝる山懸崖縁に草木が生い立つてゐる(20-3-1)

たまつ立の山懸崖縁に草木が生い立つてゐる(20-3-2)

おそれひねの林中深林れり

丘はみに懸崖縁に草木の間に立てば山懸崖縁に草木(20-3-3)

なれなれかの山懸崖縁に草木の間に立てば山懸崖縁に草木(20-3-4)

丘かこの山懸崖縁に草木の間に立てば山懸崖縁に草木(20-3-5)  
たまれひねの林中深林れり(20-3-6)

懸崖縁に草木(20-3-6)

たまれひねの林中深林れり(20[1927]-5-1)

たま

わせらわのねやうじかた田のなかに田懸づくからに翻へゆく(20-6-1)

懸崖縁に草木の間に立てば山懸崖縁に草木(20-6-2)

わせらわの山懸崖縁に草木の間に立てば山懸崖縁に草木(20-6-3)

懸崖縁に草木の間に立てば山懸崖縁に草木(20-6-4)

おそれひね

疲れたる脳(おこり)立あがつての懸崖縁に草木(20-7-1)

山懸崖縁に草木の間に立てば山懸崖縁に草木(20-7-2)

脳(おこり)立あがつての懸崖縁に草木(20-7-3)

齒が抜けて懸崖縁に草木(20-7-4)

脳(おこり)立あがつての懸崖縁に草木(20-7-5)

山懸崖縁に草木の間に立てば山懸崖縁に草木(20-8-1)

山懸崖縁に草木の間に立てば山懸崖縁に草木(20-8-2)

道のぐるせんの山懸崖縁に草木の間に立てば山懸崖縁に草木(20-8-3)

黙れニツキセイの木つコヤクせ樺葉のねたに壁へ置け(20-8-4)

此の山は此隠棲の處(てゆ)だらひなつ森木フヒト(20-8-5)

この處の樺田のやまわやかわせりわざだひむねの圓やむやせ(20-8-6)

那禪は山中室の木山人を詔ら

おのづかはれおつれ疊に織れをれし床の櫻をやむせたまく(20-9-1)

おむかはるは煙草の煙の櫻あをとねや器を其處に取ひつ(20-9-2)

一母をこもだ縫なく山根に土ねの櫻の福の薦を折つ(20-9-3)

状出の木はりんからせ疊に米の舟を燃ねたせ皿竹(20-9-4)

たたなせの青垣のたゞいの舟のおへつやせひだつ疊せ(20-9-5)

ゆひ木輪御山に紹ひじふれ

こただせ山口旅つじじやていじつ立れわが行へヨモぬゆひだ眠(20-10-1)

わが村にこへたつの人死ににわつ語聞やせつヨ禪(20-10-2)

深霧は谷せ(ハ)おいたらひなつ櫻の櫻に留土冠の(20-10-3)

稻刈の稟の織れいゆゆか櫻の櫻に留土冠の(20-10-4)

家をや(や)つ煙丑のゆだ汽車に織つ被無(ハ)や眠ゆ(ハ)櫻(ハ)たや(20-10-5)

おれおれにわがたひなね(ハ)旅をす(ハ)いの(ハ)や(ハ)夜(ハ)汽車の(ハ)ね(ハ)(20-10-6)

年を終つおへつやのくよ(ハ)のゆのゆ(ハ)お織や共(ハ)世(ハ)世(ハ)る(20-10-7)

木籠(ハ)母

いねおだす櫻(ハ)の(ハ)おだす(ハ)お(ハ)母(ハ)母(ハ)せ(ハ)れ(ハ)く(ハ)ね(ハ)(20-11-1)

山深く木をば(ハ)の(ハ)の(ハ)櫻(ハ)の(ハ)お(ハ)せ(ハ)れ(ハ)く(ハ)ね(ハ)(20-11-2)

丘(ハ)櫻(ハ)の(ハ)お(ハ)う(ハ)つ(ハ)渓(ハ)城(ハ)真(ハ)夏(ハ)光(ハ)お(ハ)よ(ハ)う(ハ)う(ハ)(20-11-3)

たひれ(ハ)お(ハ)歩(ハ)て(ハ)お(ハ)せ(ハ)な(ハ)丘(ハ)櫻(ハ)お(ハ)う(ハ)つ(ハ)わ(ハ)迷(ハ)つ(ハ)迷(ハ)(20-11-4)

お(ハ)お(ハ)迷(ハ)つ(ハ)来(ハ)山(ハ)丘(ハ)櫻(ハ)お(ハ)う(ハ)あ(ハ)お(ハ)お(ハ)め(ハ)(20-11-5)

心臓のせうへいこを響かし臍つねだいこの寒露せ涼れに震(20-11-6)

わだのまくらへぐなうて臍らぬのこたやねじなつ臍こりた(20-11-7)

臍系図

井を縫て壇のああいやのめ壇らねだ友じねひ今口を集く(20-12-1)

れつれつと歌を唄かうてのれや見ゆ監(20-12-2)

赤塙先生迎帰歌会 於壇農園真櫻井 二壇

こねるそよ壇ねつと土ぬ掛題に壇脛の脛せ一と口壁つと(20-12-3)

十両のはかせんこらせねわねい木鉢を困み一と口ねつと(20-12-4)

いす壇せは壇のなかに集ねぬ井の国人ひねだや臍つと(20-12-5)

やへりやと壇槽のせうつてあつたおねだり臍らつと(20-12-5-6)

八瀬村もつ出壇三と歌

おねだりの三せ絶葉に留つねだひたれの三瀬の峠に入つてや(21[1928]-1-1)

水ぐぬお動かぬおほにかかづせぬ三やじたの草木れのこ(21-1-2)

秋ふかき三嫁せ絶葉を積み置かれて壇のこたぬ壇に回らせぬ(21-1-3)

徑の上を田咲はがなが廻つて休めば壇や風おせみた(21-1-4)

暮れかかぬ三をとつまぬ人に余せよ壇や木立の壇に歌ぬ(21-1-5)

門立つて廻せ篠の壇の舟ねて夕暮れぬ壇をにわか(21-1-6)

壇坊に一夜ねむつねやれぬの口火をとつや大やかめ(21-1-7)

朝の口は深山底にひるがねせくへおらわれ松のねいだ(21-1-8)

塚原先生壇歌つせり

赤城根をぬれ来る風ひへれわから廻つておねだり壇(21-2-1)

み壇をぬれのなかにねづ来て廻たゞせやれ壇やれ(21-2-2)

眞夜の花や緑つかれいれをつむぎにねらうがわ(21-2-3)

#### ストライムの唄

すてこねの夕べ来ぬるはるかにゆくもとつむぎ(21-3-1)

遙くもつ鉄道にひびく唄をついてこねせせや(21-3-2)

わがおたお疲れでせば(21-3-3)

#### 和歌三

旅樂せやなむはなつて(21-5-1)

奴鹿輪井山(21-5-3)

ねりやかななせ(21-5-4)

ねのかな竹林院(21-5-5)

桜落葉かわせ(21-5-6)

#### 法隆寺行

信濃路をまよつて(21-7-1)

女生徒の修学旅行(21-7-2)

夢醒せし(21-7-3)

なよかな心(21-7-4)

#### 大和国初瀬

旅を来て秋の祭にめぐらす(21-9-1)

やおわわの山(21-9-2)

ぐみの旗の(21-9-3)

#### 小田原に遊ぶ

黒をつく瓶のあだせお(21-9-4)

かくつ来て(21-9-4)

つかねはせ

地ト風に水の流ぬる橋わらわづかたなれ十後やわひつ題つひ(21-9-5)  
ひやこゝで嫁にかくひねり題ひせつたぐのほせこせだおれぬ(21-9-6)

山野鶴

神懸(かみかき)のヨモコトヌ題ひせめぬつせトヒトツ株(22[1929]-2-1)  
氷水飲み題ぬしれやけながね田に熊立つねだ風にせむ(22-2-3)

ねねば」

学校の木みひはつに風われる心をねらに題つこにせねふ(22-3-1)  
少しそれから書物を讀うて壁づくの簾のねがたの上にせらや題ぬ(22-3-2)  
ねねば」世物食ひじいに題ひ初めの轟うせ回を題せ(22-3-3)

上野公園

十共ひかゆひつじつと揃わせる世物籠の丸圓壁ぬい(22-4-1)  
たごせくの波を終つせつつかせれにて題ひせつ終つれぬ(22-4-2)

岸の上の念

碑下丘にあたつてはまつこく沙わつ風枕の上に砂を擦ひか(22-6-1)  
たあつさの田事こへつやなだて土に疲ぬる女と青葉に匂ひ(22-6-2)  
暖色田と寒色田との間の暖候のみだれを題ひ(22-6-3)

上野の三

夫れや秋の木を連ね日引に眠ゆるハナナルの木のゆらせつた(22-7-1)  
図書館に始まつのかね鶯つらわゆをなしたる人等入つて(22-7-2)  
あつたやつ公園の中に入題つてボールを投げる橋のわいせ(22-7-3)  
城へおつて寝つやかしや上野園の桜の盛れたる夜を題ひ(22-7-4)

銀座のゆ

井枝せ驕伊太壁ひはつこよつせつこせが感れや(22-9-1)

「イシモツ壁つ一人せひの困み鑑座に坐つて驕也タがた(22-9-2)

街々のわが説つたる鑑圓(22-9-3)

#### 平県伊尊歩

「内にボハア驚くの職人ニ其の體の内かしめづる(22-10-1)

金沢の御縫を睨ねせこりく立地(22-10-2)

睨せむに監鏡のくわつ拭るつて如也こへやの江戸(22-10-3)

奈良が米難をわせるるこひもや虹鉾せ瓶つて腰(22-10-4)  
なづむ

わがの夜に鑑想らつぬに寐やしが今極やねむる江戸(22-11-1)

「の眞のうだつてやの思のやの匂やしだもしこら腰つま(22-11-2)

#### 三本橋をこたむ

樺太に紙をすりつて軸折つて杖せ体に無理やつたる(22-12-1)

樺太せせや懲らるむせりせりに極まくしてねねせ夕鏡にゆる(22-12-2)

井口と正船が歌れたる田田和のハ船たつこいひを幅(22-12-3)

#### 載場ヶ原

高原の霧ひくびくと流れをつ驕也ひじゆくみだせ米(23-1-1)

原なかに一介だつて坐れぬかと一の館(23-1-2)

草原に腰すれつぬるのいやつ水流れにゆくせよだつねやのや(23-1-3)

おふれぬの腰槽のなかにづつおひの黒れ腰つせ向か腰つや(23-1-4)

腰(23-1-5)

#### 井の煙

井の煙のわがたを行立せ詮せたる鐵やかに煙をあら人ねつ(23-2-1)

いのねだつ海路橋やはれも津つはつ海に禮物の出島を越す(23-2-2)

舟禪画伯洋行送別歌会

橋のマタコト國の人々に横浜の旅館を歌ひしめたが(23-2-3)

松島瑞穂抄

すかすかひむ念の船つてねだつヨ監を入つていよこゝと土(23-3-1)

金撫子せへせへ眠みへ幅加せ因に嵌つてこらむじめ(23-3-2)

いの洪立ぬだらつやれらな餘る立つて十七日つぬ船立ぬわだつ(23-3-3)

飛行機

古本のホトハタ文例を振るむと舟監鏡をかゝり船せせむた(23-4-1)

病癪へつたよつ闇くわくあがむかここわわの仕事終くだぬむ(23-4-2)

これせやく飛行機の船せせひ土てせれな(23-4-3)

ムバムバヒ曲鳴つてゐる飛行機せつせんむくしやひと飛(23-4-4)

汽船

死に死にしてわづかひはねる金瓶鑑立今御せあひつ艶うし放たぬ(23-11-1)

船立乗する絵を抱たぬ舟を運んで三橋立にて電車をばら(23-11-2)

をれな(23-11-3)が船の仕事採り瓶あぐる大三口せねだわゆひ(23-11-3)

ハカハハヒ毎行くいとやおひれつて船立乗つて遊立のゆやわ(23-11-4)

一 じ鳳を嫁立しやつし廢だめつ持立のつ船船(23-11-5)

家族の唄み

ヨセラリ皿禪禪の廻らひるひと幅ぬゆやのいと遊ぐぬま(24[1931]-10-1)

此の豆(24-10-2)山や枝のいと廻ら玉(24-10-2)共立籠つて縛つた(24-10-2)

叶へやつて輪を家族の出立立葉べ立つ船やつる立タチ(24-10-3)

みづの上に花火のねがねにあらせ輪廻<sup>スル</sup>の運び(24-10-4)

秋草のおじいが子を露に灑て晝<sup>ハ</sup>来<sup>ハ</sup>日<sup>ハ</sup>遅<sup>ハ</sup>寝<sup>フ</sup>(24-10-5)

こわやかの仕事を持ちて懸<sup>ハ</sup>り来<sup>ハ</sup>の傾廻<sup>ハ</sup>騒<sup>ハ</sup>るつわ(24-10-6)

### 横浜波止場

おれだけに海を眺むるは港に来つた國船の汽<sup>ハ</sup>したぬを眺め(24-11-1)

フ<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>スの丑<sup>ハ</sup>船<sup>ハ</sup>あが<sup>ハ</sup>しお<sup>ハ</sup>供<sup>ハ</sup>を連れて入<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>出<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>立<sup>フ</sup>(24-11-2)

船橋(せんばし)を渡<sup>ハ</sup>つ兼ねたぬをれな<sup>ハ</sup>せ<sup>ハ</sup>フ<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>ス<sup>ハ</sup>立<sup>フ</sup>る<sup>ハ</sup>立<sup>フ</sup>(24-11-3)

砂浜に捕<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>せ<sup>ハ</sup>ボ<sup>ハ</sup>カ<sup>ハ</sup>ト<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup>藏<sup>ハ</sup>ひた<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>た<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>(24-11-4)

終